

めぐらせりゆわらし

冒頭の語は、本願寺第八代門主蓮如上人の言葉です。「教えてやつた」「導いてやつた」など指導者意識、人から仰がれ、常に威張つていい心は、「名利名聞心（みょうりみょうもんしん）」と言つてよいでしょう。蓮如上人は、この名利名聞心を最も忌避し警戒されたのです。」のことにについて、当時の隨筆家「吉田兼好」は、その隨筆集「徒然草」につきのよくな當時の実話を出して批判しています。

この名譽を大和の田舎でひとりわが子を待つそ
の母にお見せしたいと思って送つたといふ、「母
が待つのは、おまえの名譽でも出世でもない。
この悲しい女をはやく救つてください」と一と



かはわからないが。実は、私にも一人の母が残してくれた大事な和讃があります。次回は、その話を書いてみたいと思います。（文責 前住職）

名利心が人一倍強い方でした。だから、この人が大僧正に任命され、宮中に任命状をもら以て行くときの行列は、實に華美なものだつたようです。ところが、「行列の先導ができるのは俺一人」と増賀は、破れ衣に繩結び、腰に大根を差し挟んで、汚い牛に乗り、この行列の先導に立つたそうです。わざと狂氣のふりをして、師の名利名聞心に抵抗して抗議したわけです。

もう一人「性空上人」は、身をもつて仏道捨身を実践して見せ、源信僧都は、人間の迷いと救いの眞実をしめして、「往生要集」を著し、仏教を私たちの目の前に描いてくださいました。

源信さまには、もう一つの尊い経験があります。源信さまが若いとき、天皇にお経を講義して大変ほめられ、ご褒美をいただきました。

りました。お年寄りの方の歩んでこられた人生のこと伺ううちに、難行と易行という自分の持つていたワクがだんだん私の中で薄らいでいきます。各々の方の人生がまさに陸路であり難行であるのですが、その人の人生を包み超えたはたらきを豊かに感じます。また一方で教えられるのは、私が他人に自分の経験や過去の人生を語る時、どこかで美化し、誇る気持ちが頭をもたげてくるという

にやさしくて、温かくて、懐が深いです。思えば、私が坊守のバトンを引き継いで二十五年、ずっとこうだったと気づかされます。どんなわざかなことでも、できたことを喜んでくださり、やろうとするふとすることを応援してくださいました。(門徒の皆さんと住職のあたたかいお育てがあつてこそ、こんな私でも、わざかずつ進んでこられた二十五年であつたのだと、いまさらながら、しみじみ「ありがたい、もつたいない」と思つた彼岸の一 日でした。

陸路のあやみ
難けれど

どうする

「奥さん、がんばる」

「よ、わからぬ話やつたわー」

一九三

の話やつたわー

18

「やつたわ」

先日あるお宅でお茶をいただきながら、おじいさんがいつものように昔話を始めました。おじいさんが昨日のことのように語られる話は、七十年以上前の戦時中の話で、二ヶ月前にも聞いたものでした。九十歳のおじいさんの戦争体験を何回も聞くうちに私は「またか」「もう聞きました」と心のうちに思つていきました。でも、この日はうようと尋ねて「ましまさ」。私「もひとつ」僧侶とならせていただいてから、早いもので二年が経とうとしています。その間に、ある篤志家の方が、私のための色衣と五条袈裟を寄進してくださいました。自分の眼でしっかりと見て、お気に入りのきれいな紅色の衣とそれによく映える袈裟を選ばせてもらいました。早く皆さんにお披露目したいと思